

機関番号：32675

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2007～2010

課題番号：19360282

研究課題名（和文） アジアの都市再生に関わる歴史のおよび方法論的研究

研究課題名（英文） Historical and Methodological Research on Urban Regeneration of Asia

研究代表者

高村 雅彦（TAKAMURA MASAHIKO）

法政大学・デザイン工学部・教授

研究者番号：80343614

研究成果の概要（和文）：研究成果の業績としては、報告書「島原 歴史都市の復権—まちと建築のフィールドワーク編」と「江戸木挽町の芝居町と東京近代の大根河岸—水辺都市再生のための復元的考察」を刊行し、また公刊物としては『タイの水辺都市—天使の都を中心に』（法政大学出版局、2011年3月）を出版した。研究の結論としては、アジア都市の再生には、歴史的な都市の形成過程と建築の史的変容について、精緻な研究を進めることが必須条件であることを解明した。

研究成果の概要（英文）：As this study results, “Regeneration of Shimabara city: Chapter of fieldwork of city and Architecture” and “Theater town in Edo *Kobikicho* and *DaikonKashi* of Tokyo modern ages : Restored consideration for the shore urban renaissance” was published and 'The waterfront city in Thailand' (March 2011、 Hosei University Publications) was published too. It was clarified to the regeneration of an Asian city that it was most important to advance research about a historical process of formation of the city and a historical transformation of architecture as a conclusion of the research.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	2,900,000	870,000	3,770,000
2008年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
2009年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
2010年度	3,600,000	1,080,000	4,680,000
年度			
総計	13,900,000	4,170,000	18,070,000

研究分野：建築史・都市史

科研費の分科・細目：建築学・建築史・意匠

キーワード：アジア、都市史、都市再生、都市住宅、歴史研究

## 1. 研究開始当初の背景

近年のいわゆる「都市再生ブーム」にあって、その多くは性急なプロジェクトの推進のため、あるいは法制度やデザインの提案のための研究ばかりであり、そもそも歴史都市の

再生であるがための「歴史」そのものの位置づけがなされていない。そのうえ、日本の都市再生の方法を探究するとき、民主的に成熟した社会に立ち、面的に保存が良好な状態にあるヨーロッパの諸都市の事例では、背景や

現状があまりに違いすぎることに多くの研究者が気づき始めた。その間に、実際の東京では大規模開発のプロジェクトが続々と出現し、高層ビルが立ち並ぶ風景が出現している。本来、歴史の厚みがあり魅力的だった都心部は、環境のバランスと文化的アイデンティティの喪失によって空洞化し、またかつて存在した都市と田園の明確な境界をも失って、捉え所のない様相を呈している。一方、アジアの多くの都市は、ヨーロッパとは異なりむしろ日本と似て、1990年代前半からの経済成長によって急激な都市開発を経験しながらも、歴史的な街区や建築を活かし、あるいは河川などの歴史的な自然環境を再生しつつある。

ここに、本研究の全体構想を生んだ問題の所在がある。歴史と文化、環境の時代を切り開く真の都市再生のためには、アジアの都市再生のメカニズムを歴史的な形成過程、土地所有、都市空間と住民の個性など、学術的な観点から、きちんと研究対象として位置づける必要がある。本研究では、その成果を着実に蓄積し、都市再生のための基盤を歴史的な視点に立って見出すことこそ、今後の都市のあり方を構想しうるのだという立場を表明するものである。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、アジアの歴史的都市の再生を総合的に明らかにする全体構想の第一歩として、東アジア・東南アジアにおける主要都市を対象とし、近年のその再生の展開過程を空間論及び社会論的に認識・把握しながら、都市史研究をベースにした都市再生のための方法論を一段と拡大・精緻化し、現代都市の創造に向けての歴史的な諸課題や論点を抽出することであった。

## 3. 研究の方法

以上のような背景と目的に対し、本研究は

研究期間内に三つの共通テーマ、1. 歴史的都市の形成過程とその諸類型、2. 都市再生の展開過程に見る空間的及び社会的特性、3. 都市再生のための方法論的課題を、中国・韓国・台湾・ベトナム・ラオス・タイ・シンガポールの東アジア・東南アジア地域に限定して明らかにし、その比較再生論的把握を総合的に追究した。

### (1) テーマ1. 歴史的都市の形成過程とその類型

研究対象となる都市は、伝統都市が現代都市へと至る過渡期の都市を近代都市と位置づけることで、それぞれ大別される。しかしながら、近代都市といえども、その地域に存在した伝統都市の特徴を受け継ぎ成立することもあり、一概に時代の精神がそのまま都市類型となって具現化されるとするには捉えきれない面が多い。そこで、このテーマでは、従来の素朴な都市形態論や空間構造論に加えて、都市に関わる諸権力、宗教的理念、民衆による社会・文化的諸位相などが実際の空間とどのように結びついて形成され類型の特徴を帯びようになったのかまで明らかにした。こうした背景にまで踏み込んで歴史的都市の形成過程と類型に関わる研究を蓄積しなければ、都市再生とは単なる形態やデザインの問題にしか過ぎないものとなることを再認識した。

### (2) テーマ2. 都市再生の展開過程に見る空間的及び社会的特性

ここでは、テーマ1で明らかにした各都市の形成過程とその類型の特徴が、実際の都市再生の展開過程において、いかに象徴的に抽出あるいは省略されてきたのかまで明らかにした。つまり、都市軸や統治空間・市民的な共同空間・住宅地や商業地などといった空間的特性だけでなく、その背景にある公権力・宗教的理念・民衆生活といった社会的特性について、都市再生との間でいかなる相対的な

関係が図られたのかを解き明かした。したがって、形成過程と再生の時点で、空間や社会にどのような相違が生じているのかも詳細に検討する必要があることを確認した。

### (3) テーマ3. 都市再生のための方法論的課題

ここでは、テーマ1及び2で得られた各都市の研究結果について、次に要素ごとに分類し、比較再生論としての具体的な課題を明らかにした。とりわけ、各要素が強く結びついてその都市の個性と再生のあり方を示すことが重要であることを解明した。したがって、ここでは再生のための分類をするのではなく、あくまでも都市再生のための方法論にあって、都市史研究の位置づけを明確にすることに重点を置くことが不可欠であることを明らかにした。

## 4. 研究成果

本研究の成果では、まず第一に、都市史研究を基盤とする都市再生のための方法論を明確に位置づけることそれ自体に、学術的な特色があり意義があったが、それを再認識する形で提示できたことに大きな成果がある。それを達成するためには

、次のような項目がさらなる重要な視点として欠かせないことを明らかにした。

### (1) 都市再生を語る際の研究者の位置づけ

都市史研究は、多面的・多義的で複雑であり、とくに海外を対象とする際には言語の習得や現地調査などに通常以上の時間と労力を要する。それゆえに、これまでの都市再生論では歴史が中心に据えられてこなかったともいえる。しかしながら、本研究では、研究を組織する各研究者が過去十数年にわたってアジアの都市史研究に携わってきたことから、すでにスタートの時点で比較的容易に都市再生への展開過程の分析に取り組むことが可能

であることが明確になった。

(2) アジアの研究者との学術交流が不可欠  
研究開始前後から、「アジアの都市再生」と題して、マカオ民政総署・Francisco Vizeu Pinheiro氏及び台湾中原大学・黄俊銘副教授（2005年10月）、ホーチミン建築大学・Tran Khang教授及びシンガポール国立大学・Heng Chye Kiang教授（2005年12月）、上海同济大学・阮儀三及び張松教授（2006年7月）を招き、いずれも法政大学において国際シンポジウムを開催して、本研究の今後の相互協力が確立していた。また、北京清華大学・鐘舸講師、香港大学・松田直則副教授、ラオス国立大学・Vira Anolac講師、バンコクチュラロンコーン大学・Suwattana Thadaniti副教授からも、本研究の推進に関する協力の承諾を得ていた。つまり、実際の都市再生とは国内外の多分野の専門家のなかでしか実現できず、それを達成するためには充実した学術交流が以前から必要であることを再確認した。

### (3) 都市再生のための歴史的および方法論的研究の成果

本研究は、研究の目的や方法、対象とする都市、研究の条件や環境、その過程のすべてにおいて、長年の蓄積と議論を研究協力者との間で綿密に行った結果であり、研究者相互間で論点や問題意識がまず最初に共有されていることを強調しておきたい。そうしたなかで、①都市史を中心に据えた新たな都市再生論の提示ができたこと、②アジア都市の比較再生論の構築が必須であること、③現代都市問題解明への視座獲得に強く連関していることの3点が大きな成果として挙げられる。この結果は、将来において都市再生が常態化する際の方法論として、その基盤を築くことができることを同時に解明した。

とくに、近年のいわゆる都市再生ブームに

あつては、そもそも歴史的な都市と建築の再生であるがための〈歴史〉そのものの位置づけがなされていないことが最大の問題であることを改めて示すことができた。とりわけ、アジアの沿海部の都市の多くは、1990年代前半からの急激な経済成長によって、爆発的な人口増加と都市開発を経験し、歴史を生かした都市再生、とくに専用住宅から町家、長屋に至るまでの住宅の継承をいかに実現するかが緊急の課題となっていることを見出した。アジアにおける21世紀前半の都市再生とは、いわば都市住宅の再生そのものであって、そのためには精緻な都市史・建築史的分析が不可欠であるとの結論を得た。加えて、国内外を問わず、これまで都市住宅は文物的な単体の建築として扱われてきたが、その性質上、都市の基本単位として位置付け、道・水路から街区、敷地割、敷地の規模と形状に至る一連のつながりのなかで捉えなければ、その本質を明確にしたことにはならないことの確信を得たのが大きな研究成果である。これらが本研究の最終的な成果であり、今後の研究継続の必要性を再認識した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計16件)

- ① 高村雅彦、アジア建築史家たちの航路図、建築雑誌、査読無、Vol.126、2011、14-15
- ② 笠井健、高村雅彦、中国北京における町屋の建築形式と空間構成に関する史的研究、日本建築学会計画系論文集、査読有、第75巻、2010、1279-1286
- ③ 高村雅彦、金谷匡高、旧三井家拝島別邸、文化財の保護、査読無、第42号、2010、21-37
- ④ 高村雅彦、都市と建築—その歴史的結合の解釈と方法的展開の可能性を巡って、2010年度日本建築学会大会(北陸)建築歴史・意匠部門パネルディスカッション論文集、査読無、巻該当なし、2010、1-1
- ⑤ 高村雅彦、「都市寧波」の空間構造に関する史的研究—官紳区と商工区の変容

過程一、東アジア海域交流史 現地調査研究—地域・環境・心性—、査読有、第3号、2009、12-28

- ⑥ Masahiko Takamura、”Urban Beauty under Occidentalism of Tokyo- Lost waterscape of Postwar in Architecture Holding Stalls and Floating Houses —”、International Conference on East Asian Architectural Culture I、査読有、巻該当なし、2009、483-489
- ⑦ 高村雅彦、破壊と再生のアジア、水景の都市、季刊大林別冊、査読無、巻該当なし、2009、27-31
- ⑧ 高村雅彦、中国都市史における『空間の経験』、都市と建築リーズ「個と全体」、日本建築学会、査読無、巻該当なし、2007、19-24
- ⑨ 高村雅彦、台湾における日本統治時代の公設市場建築に関する研究—近代アジアを巡る都市建築のアイデア—、民俗建築、査読無、日本民俗建築学会、131号、2007、35-42

〔学会発表〕(計10件)

- ① 高村雅彦、破壊と再生のアジア 爆発的なアーバンイズムと都市の新たなタイポロジー、国際シンポジウム 未来派の都市から真の都市へ 未来都市の100年ビジョン—イタリア未来派から、日本、そしてアジアへ、2009年9月26日、東京・法政大学
- ② 高村雅彦、欲望と享樂の都市 マカオ：海上都市の覇権と復権、2009年度日本建築学会大会(東北)パネルディスカッション、2009年8月26日、仙台・東北学院大学

〔図書〕(計4件)

- ① 高村雅彦他、東京大学出版会、「町家—中国都市のアイデア」、『伝統都市1 アイデア』、2010、261-274
- ② 高村雅彦編著、法政大学出版局、タイの水辺都市—天使の都を中心に、2011、全246
- ③ 高村雅彦監修、TOTO出版、『中国歴史建築案内』、2008、全403
- ④ 高村雅彦著・郭錫泰訳、従建築解説中国中世紀的都市社会、遼寧省博物館編『『清明上河図』研究文献匯編、万卷出版公司(瀋陽)、2007、711-721

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

高村 雅彦 (TAKAMURA MASAHIKO)

法政大学・デザイン工学部・教授  
研究者番号：80343614

(2)研究分担者  
なし

(3)連携研究者  
陣内 秀信 (JINNAI HIDENOBU)  
法政大学・デザイン工学部・教授  
研究者番号：40134481  
(H19：研究分担者)

林 賛弼 (PAKU CHANPIRU)  
法政大学・工学部・助手  
研究者番号：20350217  
(H19：研究分担者)

出口 清孝 (DEGUCHI KIYOTAKA)  
法政大学・デザイン工学部・教授  
研究者番号：30172117  
(H19：研究分担者)

大田 省一 (OTA SHOICHI)  
東京大学・生産技術研究所・助手  
研究者番号：60343117  
(H19：研究分担者)